日本心理学会若手の会
JPA Early Career Psychologist Network

Vo.3 No.1 2018
NEWS LETTER

CONTENTS

・若手の会の委員会化について
・新幹事選出について
・日本心理学会第 82 回大会若手の会企画
・イベント開催報告
・私のキャリアパス
・編集後記

若手の会の委員会化について

日本心理学会若手の会は、2013 年度に有志によって立ち上げられて以来、活動を続けてきました。そしてこの度、2018 年度から公益社団法人日本心理学会において「若手の会委員会」が設置され、本会の活動は学会の組織の中に位置づけられることとなりました。委員会化後も本会の活動内容はこれまでと変わりませんが、この変更によって活動のための予算の充実をはじめ、理事の先生方からのご意見もいただきやすい組織となったことなど、よりよい活動のための基盤を整えていただけたと考えております。今後さらに若手のみなさまに資する活動を行っていきたいと考えておりますので、引続き本会をよろしくお願いいたします。

新幹事選出について

6 月をもって、これまで本会幹事を務めてこられた鈴木華子さん、髙瀬堅吉さん、佐藤哲康さんが幹事を引退されました。そして、新たに幹事の公募を行い、佐藤徹男さん（北海道科学大学）、瀧澤颯大さん(江別市教育委員会)、中川裕美さん(広島修道大学)、宮坂真紀子さん（女子美術大学）の４名を新幹事として迎えました。これまでの幹事とはまた異なる研究・実践領域をもつ幹事を含めた新体制でよりよい運営をめざしていきたいと思います。

日本心理学会第 82 回大会若手の会企画

＜若手のワンショット発表会＞

日時：2018 年 9 月 25 日(火)9:20-11:20（第 1 日目）
会場：仙台国際センター 会議棟 第 3 会場 大会議室萩

昨年度満員御礼の企画を今年も行ないます！大会初日に自分の演題について、発表とは別に短時間で発表する機会を設けます。各自の持ち時間は 1 分間。いかに自分の研究を短時間でアピールするか？発表者、聴衆双方にとって刺激的な時間になると思います。たくさんのご来場をお待ちしております。

＜学部生プレゼンバトル＞

上記のワンショット発表会と同時開催で、学部生の発表機会も用意しました！内容は、研究計画や卒論の中間発表など、これから取り組もうとしている、または、すでに取り組んでいる内容（心理学に関係するものであれば OK です！）を 5 分程度でいかに魅力的にプレゼンテーションできるかを審査し、学部生ベストプレゼンターを選出します。学部生の皆さま、なかなか交流の難しい他分野・他大学の方々のことを知るチャンスです。院生以上の皆さま、学部生と侮るなかれ！研究の萌芽、未来の共同研究者を見つけるチャンスです。ぜひご来場ください！

＜若手の会企画シンポジウム＆進路相談会＞

「日本心理学会若手の会キックオフシンポジウム：若手にとってこれから必要なこと」

日時：2018 年 9 月 26 日(水)13:10-15:10（第 2 日目）

会場:仙台国際センター 展示棟　第 15 会場 会議室 2

今年度から若手の会が日本心理学会の委員会化したことに伴い、改めてのキックオフとしてのシンポジウムを開催します。多くの若手会員の関心事として代表的なものである「研究費獲得」「留学」「就職活動」の 3 つのテーマについて、第一線で活躍する若手の先生方から話題提供をしてもらうことで、若手会員のこれからの活動に有意義な情報を共有することを目指しています。企画終了後には、同会場でシンポジストを含む若手の会会員による進路相談会を行います。

（前田 駿太・三浦 佳代子）

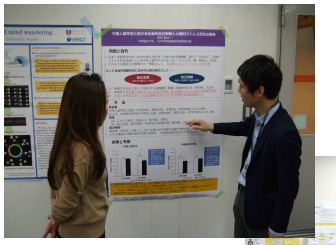
イベント開催報告

＜第 3 回若手の会キャンプセミナーの報告＞

若手の会では毎年 3 月に「異分野間協働懇話会」という合宿形式のイベントを行っています。これは、若手心理学者が分野や研究－実践の枠にとらわれず、自由に意見の交換を行う場を目指し 2015 年度にスタートしました。

昨年度は、3 月 5 日から 1 泊 2 日の日程で国立女性教育会館で開催しました。今回は、より活発な異分野間交流を目指し、ヒューマンインターフェース学会、日本基礎心理学会、日本顔学会の若手の会との共催とさせていただきました。

1 日目は、ポスターセッション、各若手の会紹介、情報交換会を行いました。ポスターセッションでは、途切れることのない活発な議論が行われました。若手の会紹介では、それぞれの学会において若手のメンバーが才智を尽くした多彩な企画に取り組んでいる様子が紹介され、刺激的で有意義な時間となりました。情報交換会は、1 日目の最後に立食形式の夕食と共に行われました。



（ポスターセッションの様子）

2 日目午前の部では 3 名の若手の先生方に講師としてご登壇いただき、それぞれのテーマについて少人数での勉強会を開催しました。名古屋工業大学の河瀬諭先生には「越境する音楽心理学」、鳴門教育大学大学院の古川洋和先生には「根拠に基づく臨床心理実践の進め方」、立命館大学の鈴木華子先生には「視野を広げる時、こだわる時」というタイトルでご講演いただきました。先生方のご研究やご経歴に基づいた興味深い話があり、時間いっぱい質疑応答が交わされました。午後の部では、招待講演として慶應義塾大学の繁桝算男先生

にお越しいただき「心理学におけるベイズ統計学の展開」というテーマでお話いただきました。ベイズ統計を数学的に理解するところから始まり、心理学研究に対してどのように適用するか、またその際の注意点等について、事例と共にご説明いただきました。参加者の多くが初心者でしたが、足を踏み入れる良いきっかけになったことと思います。

（2日目午前の勉強会の様子）

（2日目午後の講演会の様子）

ご登壇いただきました先生方をはじめ、ご来場いただきました皆さま、誠にありがとうございました。

さて、今年度は3月4日から1泊2日で京都での開催を予定しております。ぜひご来場下さい。

（佐藤 哲康・久永 聡子・廣瀬 健司）

＜第3回若手科学者サミット＞

6月4日に、乃木坂の日本学術会議にて「第3回若手科学者サミット」（日本学術会議若手アカデミー若手科学者ネットワーク主催）が開催されました。これは、各学協会の若手の会の間、および研究者個人間の学術交流と情報交換を目的とした催しであり、本会は例年参加しております。今年度は、第1部の若手研究者による研究報告において、本会が推薦した、会員の柳岡開地さん（京都大学・D3）が「スクリプトの柔軟な遂行を支える発達メカニズムの検討」というテーマで口頭発表を行いました。柳岡さんをはじめ、トップレベルの若手が最先端の発表を行う刺激的な時間となりました。また、第2部において、本会は、「総合学会における『若手の会』の役割と心理学の将来」というタイトルで、若手の会としての活動や、所属している会員の研究の内容などについてポスター発表をさせていただきました。そして、第3部においては、省庁、企業、研究所等から本邦における研究推進に第一線で携わっている方々をパネリストとしてお招きし、「よい研究とは」というテーマのパネルディスカッションが行われました。研究の質の評価方法、若手の誰もの関心事である研究費にまつわる課題などをはじめ、若手からの率直な意見に対して、パネリストからの直接の回答がなされ、白熱した議論がなされました。

（前田 駿太・三浦 佳代子）

私のキャリアパス
第4回　山田 祐樹

山田 祐樹先生
（九州大学・准教授）

＜ご略歴＞

2006 / 4　日本学術振興会特別研究員 DC1（九州大学）

2008 / 3　九州大学大学院人間環境学府博士後期課程修了（心理学）

2008 / 4　日本学術振興会特別研究員 PD（九州大学）

2012 / 4　山口大学時間学研究所 助教（特命）

2013 / 10 ～ 九州大学基幹教育院 准教授（現職）

【ランダムが好きかもしれない】

↑の略歴を見ておわかりのとおり、私のキャリアは特に奇抜な経歴も留学経験などもなくて平坦でつまらないし、そもそもまだこの渡世の駆け出しの私では、かっこいい話が何もできません。仕方がないので、とりあえず現在に至るまでの特にかっこよくない話をしたいと思います。

私の最初期キャリア構想　まだキャリアパスなんて全く意識していない幼少の頃、私には（出身地域柄）多種多様な形（具体例自粛）で犯罪というものが身近に存在していました。す、推理小説とかですよ例えばね。そういえば恥ずかしい推理小説をよく書いてました。まあとにかく、他の方よりも犯罪や反社会的な方々について考える機会が圧倒的に多く、私は司法関係の仕事に就くんだろうなと朧気に直感していました。六法読んだり傍聴行ったりして楽しんでいましたが、パターンにけっこう飽きてきていたのも事実でした。

高校までのキャリア構想　高校入学後、どうも自分の知りたいのは犯罪者の犯罪行為中の心理過程なんじゃあないかと思い始め、なぜかとりあえず孫子を読むことにしました。その行動自体は意味不明なのですが、孫子には将兵の心理を考察した上での兵法に関する記述が多くて感動し、号泣しながら読んでました。ああ犯罪心理学とかあるよな～と気付いたのもこのあたりだったと思います。例の恥ずかしい推理小説にも心理描写が増えてきていました。身近で起こった重大犯罪（詳細自粛）の際にも「実行中はどういう思いだったんだろう？」ということが気になりました。そこで、私が法曹界に入ると信じていた親（電気屋）の驚愕と反対を傍目に、犯罪心理学をやってやろうじゃあないかと決意しました。しかし完璧に超情弱だったのでどこで学べるのかが分からない。ネットなんか使えず、手元には赤本しかない。パニックになってとりあえず総合的に心理系が揃ってるところに行けばなんかできるやろという異常なまでの楽観主義に陥り、心理って名前のついた学科で臨床から基礎まで揃っていたのが広大と何らかの女子大の2つという事実上の1択状態だったのでそのまま広大受けました。進振りなんて制度を全く知らなかったので、他にもいっぱいあったはずの選択肢は皆無でした。情報大事。

学部時代　前期モロに落ちたのですが後期でなんとか拾ってくれました。入学式のあとに教員と学生で最初の顔合わせの儀が行われます。自己紹介フェイズで、自分は！犯罪心理学がやりたくて来ました！とはつらつと発言したところ、「うちではできませんよ」と冷静に諭され、入学初日で夢が潰えました。ということで一旦キャリア構想をリセットして、なんか面白いことないかとぶつぶつ言いながら俯いてキャンパスを徘徊する感じで、とても心理学科生らしく仕上がってたなあと思います。何か次の興味を見つけたかったものの、どこの大学も似たようなものかもしれませんが本格的に心理学に触れ始めるのは2年次以降なので、それまでは燻っていました。そこでその間は主に「文系」の学問に手当たり次第触れていたように思います。確かアジア音楽、法医学、聖書学などを受けていました。で、課されてもいないレポートを勝手に書いて学部生控室に勝手に置いていました。受講していない授業に勝手にレポート出したりもしていました。思い返すと当時からプレプリント共有や野良投稿的なことを実践していたようです。一方、勝手にそんなものを提出される方の教員の（主に受講者名簿との不一致による）混

乱と激昂も今になればよく分かります。しかもそれらのクオリティは本当にひどいもので、河原先生（第2回「私のキャリアパス」参照）にはミュラーリヤー錯視の実験レポートについて「こんな（ひどい）レポートは初めて見た」と言われたことを覚えています。今私が見ても相当なキツさで、むしろ最悪の例として研究室内で共有しています。界隈では「さてもさてもで始まるアレ」と呼ばれているようです。

ラボでは実験室がとてつもない稼働状況で、このとき実験の日常化を体得しました。待機参加者が多すぎて待合エリアがちょっとぬくくなっていて、今でも当時の水準は超えられないと思います。その頃、博士課程にいた小野史典さん（現山口大）に公私ともに大変お世話になりました。まあ詳細は省くべき「楽しい」日々を共に過ごしていたのですが、そうした研究室の雰囲気の中で息をするように自然に認知心理学をやるようになっていました。今でも心に残っているのが、小野さんのデスクトップに「小野アイデア集」というフォルダがあったことです。小野さんなんすかこれ〜(笑)とみんなで一通り茶化し、本人は恥ずかしがって中身を見せてくれませんでしたが、今では私のEvernote に山田アイデア集というノートがあります。書いとかないと忘れちゃいますよね。

大学院時代　広大の院試にモロに落ちたのですが九大がなんとか拾ってくれました。ちょうど同じ時に、知人が超重大犯罪（詳細自粛）を起こしたことで犯罪や司法制度などに関して再び思いを馳せることもありました。さて、この頃の私が最も強い影響を受けたのは、研究室の先輩の河邉隆寛さん（現NTT）でした。実験を日常化する習慣は定着していたものの、その実験計画や研究アイデアに関してM1の私は素人同様でした。ここで河邉さんという稀有な実力と心の広さを兼ね備えた先輩が存在したのはまさに奇跡的幸運であったと思います。毎日稚拙かつ杜撰ながらも新しいアイデアや計画をノンジャンルでたくさん持っていって相談し、徹底的にダメ出ししていただくということを繰り返していました。たぶん実験までいけるのは100個に1個くらいだったんじゃないでしょうか。これにより大変鍛えられ、今の発想様式も確立されたのだと思います。もちろん、河邉さんからするとめちゃめちゃ迷惑だったと思います。私が同じようなことをされたら最終的には正拳が出そうな予感がします。なのにそれを受け入れて、毎日毎日対応してくださったことには本当に今でも心から感謝しています。

ポスドク以後　このようにして無差別な方向から無差別な対象を検討するスタイルができていったのですが、弊害もありました。芯がないのです。なんとか学位は授与していただいたのですが、果たして自分は何の専門家なのだろうかと思い悩み、今のやり方じゃあだめだ、ただの色物の偽物だ、だからこういったスタイルは捨てなければならないんだという考えに支配されました。これがけっこう深刻で、この頃1年間に主著の論文が一本も出せないという状況に陥りました。本当に 1 word すら書けないんです。売り出していかなければならないポスドクでこの状態はヤバイですよね。結局この状態をどうやって脱したのかは全くわからないのですが（できればここで、○○と出会って良い感じの言葉をもらって変われた！みたいなかっこいい話にしたかった）、とりあえず王道だったりハイインパクトだったりな研究はいつかやれるときにやろう、まずは今のスタイルで限界までムチャクチャやってみよう、と思うに至りました(今も中国の少数民族の村でこれを書いています)。毎回違うトピックの知識や技術を1から学びつつ研究を行うのは正直しんどいし効率も非常に悪いのですが、今思えばファミコンとかもそんな感じでやってた(る)し、性格には合ってるのかもしれません。

おわりに　というわけで、これまでを振り返るいい機会をいただきました。察するに、私はランダムでありたいと思っているようです。ここでま

さかお前が出てくるとは、みたいな状況に身を置きたいようです。研究スタイルとしてももちろんそうですし、今回のお話もそうです。これまで「私のキャリアパス」を紹介してこられたビッグな先生方の流れからすれば、私はお誘いを固辞すべきだったのでしょう。ですが、ここで私が出てくることは私のスタイルと一致していたのでご寄稿いたしました。自分でも、ここでなぜ俺が…と思いましたからね。

私の話はみなさんの進路形成に何の参考にもならないとは思いますが、そういう話も含めて事例を数多く溜め込んでいくことには意味があると思いますので、今後もこのコーナーが続いていくことを願います（あと、あいつのせいで終わったと言われたくない）。私は、知性はもとより心理学者に求められる多くの技能等のレベルが「普通」です。私の研究室の学生さんも、みんな普通です。私はその普通な彼らが全国の優秀な方々と戦えるように、これまでと違った景色が見られるように、自身の生存足跡も参考にしつつサポートしています。私の心はすべての普通な若手のみなさんとともにあります。夢に向かってフルパワーでまいりましょう。

編　集　後　記

今号は、幹事会の委員会化と、新幹事の選出という大切なお知らせがありました。ますますパワーアップする本会にご期待ください。また、第 3 回異分野間協働懇話会と、第 3 回若手科学者サミットの報告が掲載されました。いずれも、日本の心理学に関わる若手の交流と、それを含めた環境の改善に関する重要な取り組みになりつつあります。多くの方のご参加をお願いいたします。

本号から、この編集後記は幹事の佐藤徹男と廣瀬健司が担当することとなりました。よろしくお願いします。

発行：若手の会幹事会
〒113-0033　東京都文京区本郷
5-23-13 田村ビル内
公益社団法人日本心理学会事務局
jps-ecp@psych.or.jp
2018 年 9 月 19 日発行
編集：若手の会幹事会